

新出の大黒屋光太夫筆日本図について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5131

新出の大黒屋光太夫筆日本図について

岩井 憲 幸

1 はじめに

今般モスクワにおいて大黒屋光太夫の手になる日本図が2枚発見された^{注1}。従来光太夫筆日本図はゲッチンゲンの3枚が知られており^{注2}、他にさらに1枚があるのではないかと考えられていたが^{注3}、それとはまったく予想外に今回の2枚が現われたのである。

筆者はさいわいモスクワの新出図2枚（ロシア軍事歴史古文書館所蔵）のフィルムを根室市博物館開設準備室の川上 淳氏より提供され、かつまたうち1枚の拡大コピーを秋月俊幸氏よりいただき、これらを見ることになった。一見してゲッチンゲンの3図と同図と認められる^{注4}。後述するがモスクワの2図はともに大黒屋光太夫の手になるものと考えてよい^{注5}。

さてそれでは、かかる2図はゲッチンゲンの3図とどのような違いを有するのであろうか。あるいは同じなのであろうか。本稿はこの点につき、写真から読みうるかぎりにおいて、究明する試みである。原図について精査することが基本であるが、そして最終的には原図につかなければならないが、上記の問題についてのおおよその答えは出しうるであろう。

以下本稿では上記5図につき、次のような略号を使用して論を進める。

1. 在モスクワ・ロシア軍事歴史古文書館所蔵 Ф. 451, Оп. 1, Дело 19, Л. 1 M1
2. 同 Ф. 451, Оп. 1, Дело 18, Л. 1 M2
3. ゲッチンゲン大学図書館所蔵 Asch 284 G1

4. 同 Asch 285 G2
 5. 同 Asch 286 G3

2 M1・M2の概観

M1 (写真1参照) は新聞によれば^{註6}大きさが縦60 cm, 横120 cm とある。M2 (写真2参照) については未詳だが, 写真に写ったメジャーから料紙全体の大きさが縦62 cm, 横122 cm ほどと思われるから, M1 とほぼ同じ大きさであろう。(cf. G1 (写真3参照) 65.5×126.5 cm, G2 (写真4参照) 64.5×137 cm, G3 (写真5参照) 66×124 cm)。なお M1・M2 とともに補修されている。M1 は中央で2枚に切断され, M2 は全体が3等分に切断されて裏打ちがおこなわれており(従って各切断箇処にすき間あり), M1・M2 とともに裏打ちの紙が各端に折りかえされて糊づけられている模様である。

以下写真によって略述する。M1 は黒の子持ち枠の図郭を有し, 左図郭外下に次のような光太夫の署名をもつ。(以下引用の日本語は縦書きから横書きに体裁を変更する。また漢字はおおむね通行体による。)

大日本伊勢國白子大黒屋光大夫 ㊦ ㊧

光太夫の〈太〉は〈大〉字。角印は〈知〉の1字, 丸印は〈忠和〉とあり, ともに黒印。さらに下の図郭外右下に次のようなロシア文字の書き込みが見えるが, 写真では一部判読不能である。

□ ? ; 1791¹⁰ 18[□] А ; Лаксманъ _____,

第1の空所は〈Дълай〉のように見えるが, 頭字が不鮮明である。第2の空所はふたかたまりで, 前半は〈го〉のように見えなくもない。後半は〈Лар〉のように見えるが〈Мар〉であろうか。全体の文意の正確なことは今ひとつ判然としないが〈製作。1791年3月(?)18日。ラクスマン。〉の意であろうか。(〈А;〉は不明としておく)。ここではとるべきは1791年であり, これが本図の製作年と推定される。(cf. G1 は〈天明九酉歳七月廿八日〉)

すなわち1789年7月28日、G2は〈天明十壹年三月下旬〉すなわち1791年3月下旬、G3は〈天明拾壹歳参月吉日〉すなわち1791年3月吉日の、それぞれ年紀を有する)⁷。ここにはラクスマンとあるが——むろんこれはキリル(=エリク)・ラクスマン——この図の製作者は彼ではなく光太夫であるが、何らかの理由で光太夫の庇護者であり、ペテルブルクに連れてきてくれた当のラクスマンの名が記されていると考えられる。

さてM1は海がうす緑色に塗られているのが印象的である。陸地や国を黒の細線でまず描く。海と陸の境はやや濃いめの青緑でふちどりされる。日本全体は地の白のままであり、国境いはオレンジ色の線を重ねる(ときに緑)。各城下町の城のスタンプが捺された上で朱か黄が塗られる(無色あるいは緑もあり)。大坂・若山・名古屋・府中・江戸は上記スタンプを組みあわせ城の数をふやしかつ石垣を書きこむ。津軽^(マ)八方外ノ浜⁸は黄色に塗る。各国・各城下をまず漢字あるいは仮名で表記し、それぞれの読みをロシア文字で併記する。時にロシア語文による説明も存する。図中央上にある方位標は二重の杓型で上部に〈比〉=北とありさらに〈H〉字を付す。(cf. G1・G2・G3ともに方位標と〈比〉字をもつが、G1のみがさらに〈N〉⁹字を有する)。M1は他図に比して粗雑の感を与える。急いで描かれたのであろうか。海の色塗り方がていねいではなく上・下・左枠に近く塗り残こしがあり、さらに上枠右外へ色のはみだしている。全体として海の色にむらが見られる。さらに日本図の右半分の日本文字には汚れがあって、あたかも書いた直後の墨が乾かぬ内に手でこすり汚したごとくである。左上隅の子持ち枠が左端迄つきでてしまっている。M1・M2ともに裏打ちされていて(又、写真もなく)、裏に何が書かれているか否か今のところ未詳である。

M2は朱の太い一重枠の図郭を有するが、朱は変色し、しかも枠が料紙いっぱい描かれているために裏打ちの返しに一部重なっている。図郭内右下に次のような光太夫の署名・年紀を有するが、一部破損している。

天明拾壹歳参月下旬¹⁰



大日本伊勢國白子大黒屋光太夫

(花押)^{註11}

光太夫の〈太〉は〈大〉字。花押は〈光大夫〉。年紀の右下すなわち図全体の右下隅、図郭のすぐ上に次の文字がみえる。ペン書きであろうか。〈D〉の後、〈St〉の後にピリオドなし。

A.D 1791

St Petersburg

(さらにラテン文字上方にさかさまに〈18〉のエンピツによる書き入れがある。むろん後のものであろう。) これらから本図の製作年月日は1791年3月下旬である。M2は保存状態が悪く、全体に料紙が黄変している。破損箇所も多いが、あまり図や文字はそこなわれていない。陸地や国を黒の細線で描き、海岸線を青でふちどる。国境いは朱線を重ねる。城下町の表示法はM1に同じ。津軽八方外ノ浜も無色。地名等はすべて漢字・仮名のみでロシア文字の表記やロシア語の説明文を一切もたない。だが、今日の大坂湾に〈A〉と、同じく伊勢湾奥に〈B〉のラテン文字大文字(ペン書きか)を有する。この2文字の存在がM2の最大特徴である(後述)。G3もロシア文字表記等を有さなかったが、地名の日本表記はM2よりも仮名にかたむいている点がことなる。今日の朝鮮半島の地名に手のこすりによる墨の汚れあり。

3 文字の書き手

M1・M2の文字の書き手につき言及しておく必要がある。より単純なM2から記せば、その漢字・仮名文字はすべて光太夫の手であると判断される。ラテン文字の〈A.D 1791/St Petersburg〉および〈A・B〉の記号は光太夫ではなくロシア人等によるであろう^{註12}。二者が同一人物によるか否か

は不明である。

M1の文字すべてが光太夫に属すると筆者は考える。地名等の漢字・仮名は言うに及ばず、それらのロシア文字表記やロシア語説明文も光太夫であろう。表記の詳細は次節でとり上げるが、まず第一に全体の印象が似ていること、さらに地名の表記等のうしろに本来無用のコンマを付すこと——光太夫は帰国後に書いたものでもロシア文字のうしろには必ずピリオドを打つ——、そして何より次のような〈л〉と〈р〉の綴り誤まりはロシア人において考え得ぬことであり、第一に光太夫に属すると考えるべきであろう。今日の隠岐ノ島と島根半島間に〈ちかし〉という距離の注記が書かれているが、ここには〈бриско〉とロシア語が付されている。正しくは〈близко〉と綴るべき語であり——〈-ско〉と〈-зко〉は問題にせず。単なる同化による発音的綴り——ここで〈л/р〉を混同しているのである。なお、この距離の注記は他図G1・G2・G3およびM2にも存しないことにも注意せよ。(短文レベルの問題は下で言及する)。次に図郭外にあるロシア文、〈Дълай: ……Лаксманъ____.〉だが、これも筆者は光太夫の手と考えたい。これこそ原図によって全体の読みと字様を観察し確定しなければならないが、今とこ光太夫とみなしたい。字様の相似が第一だが、冒頭の〈Дълай〉は〈Дълалъ〉の意味ではなかろうか。動詞の体の可否は別として、過去形を命令形で言っているのではなかろうか。『北槎聞略』巻之十一〈言辞〉中に次のような同様の例がある。

ヲデハイ 休んだ [одыхать の命令形 одыхай を日本語過去形に充当。]

繰り返すが、M1の文字はすべて光太夫に属すると筆者は見る。

4 M1の特徴

それでは一体どのような点でM1なりM2なりがG1・G2・G3に比して

独自性を有するのであろうか。

かつて筆者は G1 から G2 と G3 が描かれたと説いた^{#13}。(従って G1 を基準として考えるのが順当であろう。) M1 もおそらく G1 ともっとも密接に結びつくと考える。G1 は海を淡い青で塗りつめる。方位標上方にロシア文字〈H〉をもつのも G1 に似る。しかし仔細に検討すると、内容的に次の2点が G1 とはことなっているのである。これがすなわち M1 の特徴である。

- 1) ロシア語による説明文が G1 とは別の土地に付されている。
- 2) 陸地間の距離を示す注記が G1 よりも増加している。

さらに、前節で述べたごとく、ロシア文字も含めて M1 全部が光太夫によって描かれ書かれたということも M1 の特徴の第3として言っておかなければならない。

1) について詳述する。M1 においてかかる説明文は27存する。(これに対し G1 は11, G2 は8)。むろん以下で示す通り G1 等に共通するものもあるが、多くは新規に付されたものであり、後述するように主に各地の産業に目が向けられていると考えうる。写真では判読困難なものがあるが、次にその全文を掲げよう。光太夫の綴り・句読法のままを原則とし、一部語の切りはなしを行なった上で直訳ないしおおよその意を [] 内に示す。文法的誤りや語の綴りの誤りが頻出し、かつ構文としても判断に迷うものもあるが、いちいち訂正することは困難かつ不可能ゆえにこれを行なうことはしない。初めに通し番号を付して、通行の地名を示し、ついで光太夫のロシア語による説明文を〈:〉以下に示すこととする。ついで〈*〉以下に他図との比較を簡単に記す。

- 1 薩摩 : сацума Здѣсь растеть красное дерево. дерево у котораго кожи, наподобіе, конскаго волоса [ここには赤い木が生え、その木の皮は馬の毛の様だ。]

*G1・G2 になし。

- 2 肥前：хизень дѣлають фарфоровую посуду [陶器が作られる。]
*G1・G2 になし。
- 3 唐津：карато Здѣсь умеють дѣлать фарфоровую посуду [ここでは陶器が作られうる。]
*G1・G2 になし。
- 4 対島：цушима на смѣ островѣ японской, перевотчикъ [この島に日本の通訳がいる。]
*G1・G2 になし。この通訳は朝鮮語通事であろうか。
- 5 下関：симоносики въ сей городѣ галанцы приежають. [この町にオランダ人がやって来る。]
*G1・G2 になし。この記事は長崎に付すべきもので、誤りか。
- 6 備前：бизень дѣлають фарфоровую посуду. [陶器が作られる。]
*G1・G2 なし
- 7 四国：Сикоку На семь островѣ лошади малаго росту, обьблѣзьяны малаго росту по скоро учется, самая чистая сольи много, также есть рыба (кацуо Японское назвають) и парасоли делаютъ. [この島には小型の馬がおり、小型の猿はたちまち芸を覚える。純度の高い塩が沢山あり、又日本名カツヲという魚もいる。又傘が作られる。]
*G1・G2 なし
- 8 丹羽：тамба Здѣсь дѣлають тавту разнаго цвѣту только бѣлаго цвѣту не дѣлають [ここでは様々な色の琥珀織が作られる。白い色のものだけは作られない。]
*G1・G2 になし。
- 9 丹後：тангу Здѣсь дѣлають матеріа половина шелковы и

даба. [ここでは絹と木綿半々の生地が作られる。]

*G1・G2になし。

- 10 山城：ямасиро Здесь рождается государственной бумаги много
всёкой всечины довольно [ここではキワタができる。あらゆるもの
が豊富にある。]

*G1・G2になし。

- 11 琵琶湖：Озеро [湖]

*G1は〈水海〉のみ。G2に〈水海 Мизоуоми. Озеро [湖]〉と
ある。

- 12 竹生島：островъ на озере Японская церковь во оную
ходятъ мущины [湖上の島。日本の教会があり，そこへは男だけが
行く。]

*G1に〈остров на озере тут японская црковь входят одне
мушины [湖上の島。そこには日本の教会があり，男だけが入れ
る。]〉，G2に〈На островъ сего озера храм въ кои одни мушины
ходятъ. [この湖の島には神殿があり，その中へは男だけが行
く。]〉と似た記事あり。

- 13 大坂：осака государевъ дворець [王の宮殿]

*G1に〈公坊様明城 гдрвь простои домъ [国王の住んでいない
館。]〉，G2に〈дворецъ [宮殿]〉とある。

- 14 大和：ямато чай бумага дабу дѣлають лакъ много [茶，
紙，綿織物が作られ，漆が多い。]

*G1・G2になし。

- 15 和泉：изуми все губрнія упражняется о приуготовлений
вина водки и разныхъ напитковъ [全県が酒やあらゆる飲み物の製
造を行なう。]

*G1・G2になし。

16 紀伊，和歌山：кино куни вакаяма великое множество цитроновъ, также Золотыя Серебряные мѣдные железныя руды, наслѣдники государскія, [大量のミカン。また金，銀，銅，鉄の鉱山あり。国王の後継者たちがいる。]

*G1 の紀伊国に <здесь и рудокопныя заводы [ここに採鉱場もあり。]>, また和歌山に <зане имениемъ у гд^с наследника даетъ онои командиръ сына [なんとになればその大名が自分の息子を將軍継嗣としてさし出す。]> とあり, G2 の紀伊国には <Здѣсь рудокопныя заводы. [ここに採鉱場あり。]>, また和歌山に <резиденція. [城館]> とある。

17 新宮：сингу Здѣсь есть разныя напитки. [ここには種々の飲み物がある。]

*G1・G2 になし。

18 越中：етчу Здѣсь дѣлають лекарству. [ここでは薬が作られる。]

*G1・G2 になし。

19 名古屋：нагоя наслѣдники государскіе [国王の後継者たちがいる。]

*G1 の尾張国に和歌山と同一の將軍継嗣の記事があり, G2 の名古屋に <резид. [城館]> の略記がある。

20 尾張：овари Здѣсь родится наподобіе роскаго ореха шарочинская пшена [ここではロシアのクルミに似た木がはえ, イネができる。]

*G1・G2 になし。

21 高田 (越後ノ)：таката въ сей области дѣлають самое ченное полоскю смен всякаго цвѣту нитки [この地方ではあらゆる色の糸をまぜた最高に高価な稿織物が作られる。]

*G1・G2になし。

- 22 府中(駿河ノ): ฟูцу Государень дворець. отъ Эда до
фуцу. 40 версть. [国王の宮殿。江戸から府中迄40露里^{註14}。]

*G1に大坂と同じ〈公方明城 гдѣрь домъ престои〉の記事あり。
G2なし。

- 23 江戸: Эдо Государя рѣзиденціе, [国王の城館]

*G1江戸に〈公坊様 кубо сама гдѣрь [国王]〉とあり, G2江戸
には〈公坊 Столичный городъ Едо. [首府江戸]〉とある。

- 24 伊豆七島: Изу-но нана сима На сей острово призылають
въ сылку [この島へ流人が送られる。]

*G1になし。G2に〈для ссылошныхъ людей мужеска полу. [男
性流人のため(の島)]〉とある。

- 25 八丈島: хачизо фабрики тафтяны самая хорошія и воспы
небываетъ, [最上の琥珀織の工場がある。疱疹がはやらない。]

*G1に〈пребогати островъ делаютъ жители лутчие фанзы и
народъ пригожеи оспы никогда небываетъ [非常に富んだ島。住
民たちは最上の絹織物を作る。人々はきれいで、疱疹は決してはや
らない。]〉, G2に〈Жители дѣлають самую лучшую фанзу. На
ономъ оспы небываетъ. [住人たちは最上の絹織物を作る。この
島では疱疹がはやらない。]〉とある。

- 26 津 軽 八 方 外 浜^{註15}: чугару, ахпо, сотоно хама вилики
(ママ)
песокъ, [広大な砂地]

*G1になし。G2に〈Пустая пещанная страна [何も無い砂の国]〉
とある。

- 27 羅利国: расечу коку а суда присылають въ сылку жен-
шинъ [船で女の流人が流される。]

*G1に〈на ономъ острову женской поль а мужеска нетъ [この

島は女ばかりで男はいない。}], G2 に〈Островъ для ссылошныхъ женщинъ. [女の流人の島]〉とある。

以上27ヶ所のロシア語による記号のうち、G1・G2の一方とでも内容が重なるものは11・12・13・16・19・22・23・24・25・26・27の11ヶ所ではあるものの、これらは将軍に関するものや、その土地のいわば地誌的説明である。これに反し、M1で新たに加えられた記事は各地の産業を簡潔に述べていることは明らかである。G1・G2においてはむしろ日本周辺の島や陸地に伝説的記事が付されていたのだが^{注16}、M1はむしろ日本国内の実際の記事を採用しているとみることができる。これがM1の一つの特徴点と言えるのである。

次に2)の問題に移る。光太夫に日本図を描かせたロシア側は彼の船頭という職業に目をつけてか、陸地間の距離——船から見れば地方への距離——を図中に注記せしめた。この注記は5図中で最大17ヶ所であるが、このうちM1は15ヶ所、M2は9ヶ所、G2も同じく9ヶ所、G1は4ヶ所（ロシア語のみ5ヶ所）、G3はまったく無しという順である。この距離の注記の多さがM1さらにM2の特徴の第2と言えるであろう。次表はその対照表である。欄中に日本語を引用し、対応のロシア語がある場合は表外に一括して引用する。なお言うまでもないが、現実の地理と合致しない場合があることに注意されたい。

* 棒線は欠如を, R は日本語がなくロシア語のみ存することを示す。

番号	場所	G1	G2	G3	M1	M2
1	薩摩・南宋国間	R	とおし	—	此間殊ノ外とおし	とおし
2	日向・硫黄島間	—	—	—	ちかし	—
3	対馬・長門間	—	—	—	ちかし	—
4	朝鮮・岩見間	殊ノ外ニ相見得候	とおし	—	此間とおし	とおし
5	玄海島・出雲間	—	—	—	ちかし	—
6	隠岐島・出雲間	—	—	—	ちかし	—
7	瀬戸内海伊予付近	R	地方ちかし	—	地方ちかし	地方ちかし
8	紀伊・四国間	殊之外ちかし	—	—	—	—
9	遠州・羅利国間	此嶋とおし	とおし	—	—	地方とおし
10	遠州・伊豆七島間	—	—	—	此間殊の外ちかし	—
11	伊豆七島・羅利国間	—	—	—	とおし	—
12	蝦夷ノ近島・上総間	とおし	とおし	—	かなりとおし	—
13	メナシプロ・下総間	—	とおし	—	とおし	とおし
14	テシオプロ・奥州間	—	とおし	—	ちかし	とおし
15	松前・津軽八方外ノ浜間	R	ちかし	—	殊の外ちかし	ちかし
16	佐渡ヶ島・越中間	—	—	—	ちかし	—
17	雁道・能登間	此嶋とふし	とおし	—	此間殊ノ外とおし	とおし

上表中14が M1 と M2・G2 でこととなっている。M1 のミスであろうか。

以下 M1 を中心に対応のロシア語を光太夫の原文のまま引用しておく。

上表と対照されたい。

1 *большо расстояние отъ японіи*, [日本から大距離]

*G1 : *весма отдаленно* [きわめて遠し], G2 なし。

2 не далеко отъ японіи, [日本から遠からず]

3 блиско [近い]

4 далекомъ растоянніи отъ японій [日本から遠距離]

*G1 : отсего места японская земля вовремя чистаго горизонта видно [この場所から水平線が清明の時に日本の地が見える], G2 なし。

5 блиско

6 бриско [sic!]

7 сего острова можно говорить, которой стоитъ на другой сторонѣ [この島は反対側に立っていると言える。]

*G1 : оное блиско [対岸近し]; сие место обстоить блиско [この場所は近くにある。], G2 なし。

8すべてでなし。

9 なし。

*G1 : сие весьма место отдаленно [この場所はきわめて遠い。], G2 なし。

10 блиско

11 недалеко, [近し]

*ロシア語と日本語に齟齬。日本語は9が, ロシア語は10が残ったものか。

12 весьма далеко [きわめて遠し]

*G1 : сие место отстоитъ весьма далеко [この場所はきわめて遠く離れている。], G2 なし。

13 далеко

*G2 なし。

14 не такъ далеко [さほど遠からず]

*G1・G2 なし。

15 блиско

*G1 : блиское место [近い場所]

16すべてでなし。

17 далеко [遠し]

*G1 : оной островъ во отдалена [この島は遠隔にある。], G2 なし。

5 M2 の特徴

M2は一見してG3に似ている。図郭がともに朱で、海岸線を青でなぞる。(津軽八方外ノ浜はG3は他と同じく黄色に塗るが、M2は白のまま。)国境いはともに黄色を重ねる。しかし、M2とG3は①地名の表記法が異なり、ついで②陸地間の距離を示す注記をG3はまったくもたない、という点で違いをみせている。②は前節の表で明らかであろう。①についていえば、G3は地名の漢字表記を極力排し、仮名表記を主としていること。特に城下町については片仮名を使うのが原則とみてとれる。(〈江戸・大坂〉等若干の例外あり)。これに対しM2はこうした特別の方針はなく、M1にとほぼ同じ表記法である。そして、すでに述べたごとく、なによりもM2の最大の特徴は、③大坂湾と伊勢湾にそれぞれ〈A〉と〈B〉の記号が書き込まれている点である。③の表示は何を意味するのか判然としない。書き込んだのは光太夫ではなかろう(上述)。たとえばロシア使節が京をめざす場合の最適の寄港地をさし示すのであろうか。

いずれにせよ、上記3点がM2の特徴である。そしておそらく、M2はM1を簡易化した図であり、この図にロシア側は使節を派遣する際を想定し、京へ至る最適の港を表示したのではなかろうか。さらに想像をたくましくすれば、M2ひいてはその親図とも言うべきM1がロシア中央に保持されて残ったゆえんは、こうした事情であったのではなかろうか。

6 光太夫の文字表記

ここで光太夫の文字に関する態度を軽くとり上げてみたい。実の処、筆者の関心は元来ここにある。先に G1・G2・G3 を含めて光太夫の表記法につき検討したことがあったが、M1・M2 についても若干述べる。古来わが国では地名の表記に関し元来自由な態度を有していたわけであるが、しかし光太夫の場合はそれがいっそう促進されているとみられるからである。

はじめに漢字・仮名等による表記である。全般的傾向として、用字法が自由闊達であると述べねばならない。

例： 宝き [伯耆] M1； はふき國 M2

幸ち [高知] M1, M2

岩うが嶋 [硫黄島] M1； 岩ウが嶋 M2

さらに補えば、光太夫は漢字に仮名——平仮名・片仮名さらに万葉仮名——を自在に組みあわせ、宛字も頻繁に用いる。また光太夫独特の書きぐせがあって、さらに俗字や通行体を多用し、彼一流のくずしや割り字もあって、ときに読みにくいことがある。これらは先に述べたことがあるので例示することは控える。すなわち M1・M2 にあっても G1・G2・G3 と同傾向にあるとしてよい。

ロシア文字については2つに分けなければならない。第1はロシア語としての、第2は日本語の読みをロシア文字で表示する際の、それぞれの用字法である。

第1については次のことが言える。この場合第4節で引用したロシア語説明文が材料となる。ここでは綴りのみならず、ロシア語全体から言及する。

- (1) 大文字・小文字の使いわけが不安定である。
- (2) パンクチュエーションが不安定である。

- (3) 誤った綴りが散見する。
 - (イ) ひどい誤り。
 - (ロ) ケアリスミス。脱落。
 - (ハ) 発音的誤り。
 - (ニ) **аканье** による誤り。
 - (ホ) 動詞変化形の誤り。名詞等変化形の誤り。
- (4) 18世紀の綴りを温存する。
- (5) 生格 -y を多用する。
- (6) ロシア語の構文として判然としない。

(1)については第4節引用文の冒頭をみられたい。小文字で始まるものが多い。ただしこれはいわば18世紀的といえ、ロシア人の文章においても装飾性がまさっていて、今日のように大・小文字の書き方は判然としない。(2)も18世紀的とはいえるが、光太夫の場合、ピリオドについてはラクスマンあたりから強く教授されたらしく、帰国後もロシア文字のあとには必ず書くのだが、ここでは文末に付されることが多い。それに反し、ロシア文字で読みを示す場合には一語なのにその語末にコンマを付すことも多い。ここではまたコンマとピリオドを混用する。なお、字体は18世紀的なヴァリエントをほとんど用いていない(例えば ж のそれなど)。

(3)の(イ)は例えば次例である。()内は上述例文の通し番号。距離に関する注の通し番号については小丸を付す。[]が正しい形。

объблезьяны (7) [обезьяны 猿たち]

бриско (6°) [близко]

вилики (26) [великий]

第2の例は日本語のくせがロシア語に影響を与えた場合である。第3の例も光太夫の方言が影響しているとみられる(イ/エの混同)。同じく方言によるものは次に問題とするロシア文字での読みの場合にも多くみられるところである。すなわちサ行とシャ行、ツァ行とチャ行の混同である。

шарочинская (20) [сара-]

ченное (21) [цѣнное]

рѣзиденціе (23) [резиденція]

同様にまた、次は o/y の混同によるものであろうか。

роскаго (20) [русскаго]

въ сылко (27) [въ ссылку] cf. 24

同じく c/z の混同の例。

призылають (24) [присылають]

なお e/ъ の混同はロシア人でも日常であったから、光太夫に個有のものとすることはできない。次のような語中の-ъ も同様だが (G1 も同じく-ъ を欠く)、12° ではかえて光太夫は正しく <весьма> と綴っている。

весма (9°)

次は逆に-ъ を付加した例。

церьковь (21) [церковь]

(ロ)の例は次の通り。単純な脱落である。

смь (4) [семь]

губрня (15) [губернія]

(イ)の例は次の通りである。同化によるもの、近似の発音によるもの等が含まれる。いわば発音的綴りというべきものである。

перевотчикь (4) [переводчикь]

галанцы (5) [голландцы]

приежаютъ (5) [пріѣзжаютъ]

тавту (8) [тафту]

всской всечины (10) [всякой всячины]

мучшины (12) [мужчины/мушины]

сылку (24) ; сылко (27) [ссыл-]

воспы (25) [оспы]

женшинъ (27) [женщинъ]

блиско (1°他) [близко]

расстояние (1°) ; расстояни (4°) [расстояніе ; расстояніи]

(二)は(一)に含まれるとも考えられるが、特に立項する。аканьеとはロシア語の方言において、無アクセントのoとaが中和されて、aに近づいて発音されることをいう。次例がそれゆえの誤った綴りと考えられる。

галанцы (5) [голлан-]

шарочинская (20) [сара-]

(二)は次の通りだが(i)動詞に関するもの、(ii)形容詞に関するものの典型例をかかげるにとどめる。又、語幹についても含める。

(i) учется (7) [учатся]

называютъ (7) [называютъ]

упражняется (15) [упражняется]

(ii) вилики (26) [великѣ]

большо (10) [большое]

золотыя, железныя (16) [—ые]

государскія (16) [—іе]

なお本項に関して(6)も参照せよ。

(4)は、例えば次のような、接続詞および前置詞等を関係する後続の語につづけて綴る例である。(上記引用では離して引用した)。

укотораго (1) [у кото-]

вооную (12) [во оную]

асуда (27) [а суда]

(5)は次例であり、いずれも許容される形である。

росту (7, bis)

цвѣту (8)

(6)に関し、次が典型である。すなわち光太夫のロシア文は単文を主として

おり、時にこれを並置する (parataxis)。ただまれに関係詞を用いたりして、従属構文をつくるが、文法的関係が判然としない。例えば1がそうである。一方12のように、よく分かるものもある。ロシア語に大事な性・数・格の概念は光太夫にはやや稀薄であったであろう。詳述を避けるが、語尾を観察するに、正しい場合と間違っただけの場合とがあり、錯綜しているのである。いずれにせよ、以上のことからこれらのロシア語文は光太夫に属するとみなすことができるのである。

さて第2の問題——ロシア文字による地名の表記——につき、略述したい。ここで第一にあげるべきは次の点である。[] 内は通名。

- (1) 促音の表記に **т** を用いる。

битчу [備中] cf. G1 биччу, G2 Битчу.

сетцу [摂津] cf. G1 шецу, G2 Шецу.

егчу [越中] cf. G1 Ечу, G2 Ечу-.

ここでは促音を3例とも **т** で綴っており、他では **д** か **т** でゆれていた^{註17} 光太夫にとり長足の進歩と高く評価すべきであろう。さらに例えば〈тамба[丹波]〉のように唇音の前の **н** を **м** で綴ること (しかし cf. нанбу [南部]) や、〈вкучияма [福地山]〉のように無声化した音のごとく〈フ〉を綴るのは、光太夫が日本語を離れて徐々にアルファベットと発音の関係に習熟して行く様子をつけるものである。

ローマ字としてのロシア文字の用字法は、これも詳述をさけるが、前の報告と同じと結論づけてよい^{註18}。ただ光太夫の方言や個人的なくせによる綴りは以下のように依然として存在する。以下 G1 とのみ比較する。

- (2) **イ/エ**の混同。

симочуки [下野] cf. G1 шимоцки

симоносики [下関] cf. G1 Симоносики

сатаки [佐竹] cf. G1 Сатаки

- (3) **オ段/ウ段**の混同。

саноки [讃岐] cf. G1 сануки

тангу [丹後] cf. G1 танко

миазо [宮津] cf. G1 миазу

иноя-ма [犬山] cf. G1 ино яма

тесиобу-ру [テシオプロ] cf. G1 тисиво буро

чuzень-коку [朝鮮国] cf. G1 чосень

- (4) <ツ> をふつう цуで綴るが、しばしば чу (42) でも綴る。

шимочуки [下野] cf. G1 шимоцки

мачумае [松前] cf. G1 мацумаэ

расечу коку [羅刹国] cf. G1 расецу коку

мачуо [松尾] cf. G1 мацуо

учуномия [宇都宮] cf. G1 уцуномиа

мачу-е [松江] cf. G1 мацукаэ

чуруока [鶴岡] cf. G1 цуруока

чугару [津軽] cf. G1 цукару

逆に <чу> (チュ) を <цу> (ツ) と綴る

фуцу [府中] cf. G1 хучу

- (5) ゼをふつう зеで綴るが、時に же (ジェ) で綴る。

ечижень [越前] cf. G1 Ечжинь

жеже [膳所] cf. G1 деле

また次のようなロシア語ふうの表記が散見することも指摘しておく必要がある。

- (6) 母音連続のうち、第二母音 <й> を、<и> を用いて表記する。(むしろ <и> で表記することもある。)

кавагой [川越]^{註19}

генкай ношима [玄海ノ島] cf. каи [甲斐]

- (7) 母音を脱落させたロシア語ふうの綴りを用いる。

вкучияма [福知山]

なお、ロシア語自体の綴りでもそうであったごとく、〈e〉と〈b〉は区別されずに同じく〈エ〉を表記している。ただし、〈b〉は母音連続の第2の位置に立つような場合は用いられず必ず子音のうしろに立って綴られる。

дѣва [出羽]

какѣгава [掛川]

козукѣ [上野]

курумѣ [久留米] cf. мачу-е [松江]

以上のような日本語・ロシア語双方のロシア文字綴りの特徴点から、これらがロシア人によるものではなく、日本人によるもの、すなわち光太夫によると筆者は推量するのである。

7 原図の問題

最近海野一隆氏は光太夫日本図が依拠した原図につき、〈つかる八方外の浜〉という注記をもとに次のように述べている^{注20}。すなわち光太夫は、元禄年間以降の各種節用集、続く宝暦年間に始まる小型歴史便覧『年代記絵抄』『年代記新絵抄』のうちどれかの図に従った。ただし、〈つかる八方〉の〈八方〉は節用集の図では大体〈がつほう〉となっているが、『年代記絵抄』は〈八つほう〉と誤っており、あるいはこれをも光太夫が所持していたかも知れぬとし、しかも『年代記絵抄』の図の長門と筑前の間が陸続きと受けとられても仕方のないような表現となっており、光太夫が自分の図において本州と九州を地続きとしたのはこれに災いされた可能性もある、とする。原図の問題につき、亀井高孝の説から一步前進したといえよう。

筆者は目下調査中ゆえ、意見を述べることは慎むべきだが、多少考えを述べたい。確かに光太夫は自分の描いた日本図中に多少の表記の差はあるもののG3をのぞき、〈つかる八方外の浜〉の注記を施している。日本語表記と

ロシア語表記はそれぞれの図において次のようである。(棒線は無しを示す)。

G1 : つかる八方外の濱 цукару хаппо сотоно хама

G2 : ツカル八方外ノはま цугарухаппо сотуно хама. [ロシア語注省略]

G3 : _____

M1 : ツガル八方外濱 чугару, ахпо [sic], сотоно, хама [ロシア語注省略]

M2 : ツカル八方そとの濱 _____

*M1の **ахпо** は **хапо** の綴り順の誤り^{註21}。M2の日本語表記は他と同じく縦書き3行だが、他はすべて右から左に書かれているのに対し、M2のみ左から右の行に書かれている。

日本語表記の多少の違いはともかく、ロシア語綴りから光太夫は、〈つかる〉は〈ツカル/ツガル〉と二様に、〈八方〉は〈ハッポー〉と、〈外の浜〉は〈ソトノハマ〉と一様に読んでいるとみられる。

〈つかる八方外の浜〉は普通〈津軽合浦外浜〉と書き〈ツガルガッポウトガハマ〉あるいは〈ツガルガッポウトノハマ〉と訓ずるようである。〈合浦〉は早くからおそらくは変体仮名の〈か〉と仮名の〈ハ〉の相似による誤読と誤刻からか、〈八方〉と誤伝された。たとえば、節用集の日本図に密接に関係すると考えられる『大日本國之図』^{註22}(明和頃成立か)には、〈つかる八つほふそとかはま〉とある。節用集中〈合浦〉の〈かつ/がつ〉を〈ハつ〉とする図があるのではなかろうか。

さて、この注は一体何であろうか。これらは地名を重ねあわせた文句であり、M1に光太夫がロシア文字で表記する際のコンマは、あるいはこうした語源意識を反映するのかもしれない。しかし、外浜にまつわる〈うとう伝説〉はさておき、鬼界島ともども外浜が都を遠く離れた土地をさし示し、異郷を示したわけで、〈津軽合浦外浜〉は僻遠かつ広大の地をたとえる俗諺であっ

た。G2 のロシア語 〈Пустая песчанная страна [何もない砂の国]〉あるいは M1 の 〈велики песокъ [広大な砂地]〉は、光太夫がこの注を単純に地名の重なりとはみていず、当時の常識にそって、俗諺として知った上で説明を加えたと考えられる。元来、原図中において、羅刹国や雁道に付される注と同じく、これらはこの土地に対する説明の注であり、それがたまたま俗諺であったわけであり、光太夫は正しくこれを読みとっている。ただ、光太夫は東国の地名になじみがうすかったようであり、自分の日本図においても、しばしば誤記や誤読を行なっている点もないがしろにできないであろう。例えば〈烏山〉を〈鳥山〉(G3 は〈トリ山〉と表記)と誤まり、〈トリヤマ〉のごとくロシア文字で G1・G2・M1 は示している。〈古河〉も同様で、まず〈古川〉と異表記し、ついで〈フルカワ〉と後者にひかれてロシア語で読んでしまっている (G1・G2・M2)。このようなことから、光太夫が原図自体に書かれている〈ハつ〉を〈ハつ〉とそのまま踏襲して自分の日本図に書き入れたのか、あるいは原図では変体仮名で正しく書かれた〈かつ〉を見誤って〈ハつ〉と読んでしまい、自分の図にそう写した——そしておそらく原図の日本図は小型であった——かは、筆者にはにわかに決めがたいような気がしてならない。しかしながら、やはり〈つかるハつほう外の濱〉と〈ハ〉と〈の〉を含む注記をもつ原図を光太夫遭難時以前すなわち天明2年(1782)以前の出版物中に模索することを、この場合第一しなければならない。そして光太夫が節用集を2冊もっていたことも心にとめておかなければならないだろう。いっそうの究明を要するのである^{註23}。

8 ま と め

G1・G2・G3につき、かつて筆者は異文化の一資料としてロシア側がとらえたのではないかと書いた。日本北辺に未知の部分があったにせよ、当時の地理学の水準に照らせば、光太夫図が実際の日本を描いているとはいいが

たいとロシア側はみたであろう。M1・M2はこれらの点を十分に承知しながらも、日本人漂流民光太夫自身によって描かれた日本図として尊重され、かつ少しでも実際の知識を図中に盛りこんだ図ではなかったか。すなわち、G1・G2・G3とM1・M2は図としては同図であるが、本国人によって描かれかつもたらされた情報を含む、実際のな地図として保存されたのではないのであろうか。M2はM1と関連を有し、いわば略図で、都への接近が利便である港湾を2ヶ所表示している。おそらくロシア側のだれかが書き込んだのであろう。ただ、M1・M2ともに実際に何らかの形で用いられたのか否か、今の処は知らない。

光太夫の描いた日本図5枚は、1枚中最大223ヶ所の地名を有する。その位置と地名の同定はほぼ半ば終えているが、その当否の検討、またさらに原図の問題については、稿を改めなければならない。

〔謝辞〕写真1・2は根室市博物館開設準備室の川上淳氏および根室市教育委員会より、写真3・4・5はゲッチンゲン大学図書館より各々許可を得て掲載した。また秋月俊幸氏および筑波大学図書館の篠塚富士男氏からは資料につきご教示を得た。記して謝意を表する次第です。

N. B. Thaks are due to Dr. Helmut Rohlfing, Ms. Bärbel Mund and Niedersächsische Staats-und Universitätsbibliothek Göttingen for permission to publish the photographs.

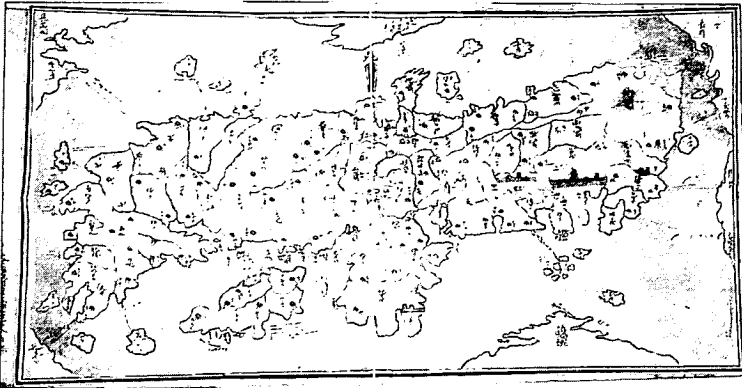


写真1 M1 General Map of Japan, by Kodayu, 1791. Ф. 451, Оп. 1, Дело 19, Л. 1, Цгвиа СССР.



写真2 M2 General Map of Japan, by Kodayu, 1791. Ф. 451, Оп. 1, Дело 18, Л. 1, Цгвиа СССР.

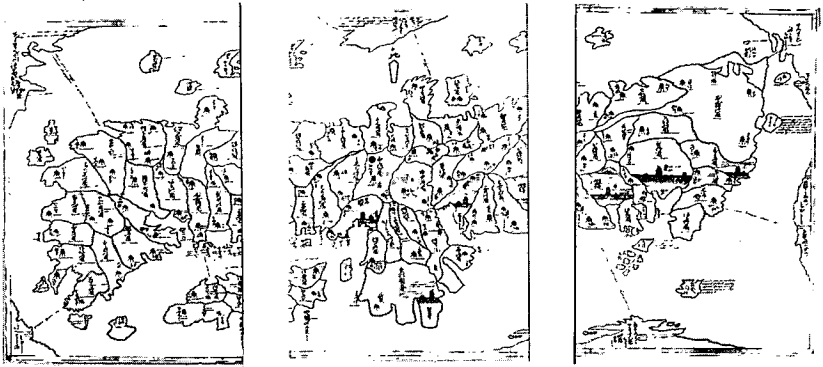


写真3 G1 General Map of Japan, by Kodayu, 1789. Cod. Ms. Asch 284, NSUG.

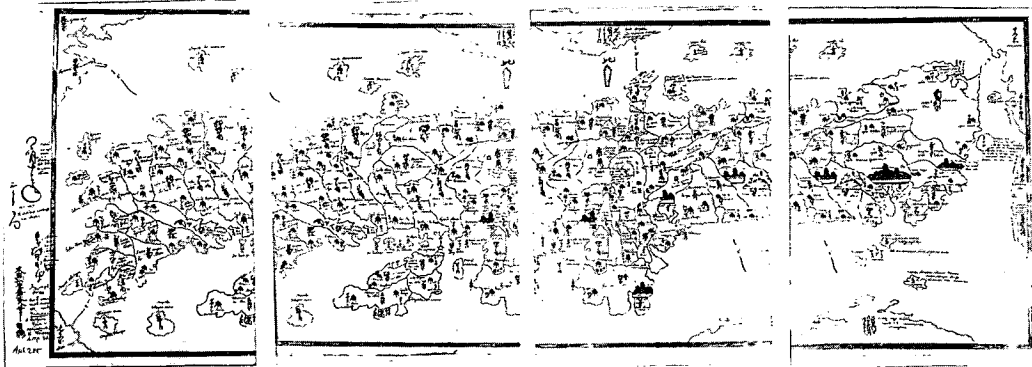


写真4 G2 General Map of Japan, by Kodayu, 1791. Cod. Ms. Asch 285, NSUG.



写真5 G3 General Map of Japan, by Kodayu, 1791. Cod. Ms. Asch 286, NSUG.

注

- 1 北海道新聞1999年2月6日夕刊および東京新聞1999年2月7日朝刊の記事を見よ。また発見の経緯等については次を見よ：川上淳〈ロシア軍事歴史古文書館から発見された大黒屋光太夫筆日本図二枚〉ナウカ「窓」110号，1999年10月。
- 2 奥平武彦〈ギョツチンゲン大学図書館の日露支関係文書〉満鉄各図書館報「書香」45号，昭和7年12月。
- 3 例えば亀井高孝の次に付された解説を見よ：『北棧聞略』昭和12年 三秀舎。なおこれについては第1刷，同再版にのせる解説中のみ言及する。
- 4 在ゲッチンゲンの3図については次を見よ：岩井憲幸〈ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について——書誌学的・文献学的一研究——〉「明治大学教養論集」269号，1994年12月。
- 5 在モスクワの2図のおおよそについては上掲注1の文および次を見よ：岩井憲幸〈光太夫の署名——ロシア軍事歴史古文書館所蔵光太夫筆日本地図発見によせて——〉「地域史研究 はこだて」30号，函館市史編さん室，1999年10月。
- 6 注1を見よ。
- 7 G2・G3およびM1・M2の計4図が1791年3月に作製されていることになる。
- 8 この地名にかかわる問題については後述（第7節）。
- 9 ラテン文字大文字の〈N〉。ただし光太夫はロシア文字〈H〉を〈N〉のようにも書くが，ここでは形状を問題とするから，あえてこのように呼んでおく。
- 10 光太夫は天明11年がすでに寛政に改元されて同3年であることを知らなかった。なお，原本において〈拾〉の字は木偏，〈壹〉の字はばらけて書かれている。また印願につき〈印を模写して手書きで描かれているように見える。〉という。判定は原本で行なうべきだが，たしかに形が乱れているが，一度擦した印をなぞった可能性もありうる。
- 11 花押については注5拙論を見よ。
- 12 ここでいうロシア人等は広い意味である。そこにあったドイツ系ロシア人あるいはドイツ人等をも含む。
- 13 注4拙論。
- 14 1露里の露里が *путевая верста* であれば1.08 km，*межевая верста* であれば2.16 km。ただし江戸・府中間は約44里ゆえ，日本の里を *верста* とみたてたものか。
- 15 第7節参照。
- 16 例えば，雁道や羅利国に付された記事を見よ。
- 17 この問題については注4の拙論および次を見よ：岩井憲幸〈大黒屋光太夫書蹟資料の語学的側面〉「明治大学人文科学研究所紀要」第40冊，1996年。
- 18 前注の2拙論を見よ。なお長音について特別の表記を有さない。
- 19 はじめ〈カワゴエ〉と〈オエ〉の〈エ〉が〈イ〉となり，ついで〈オイ〉の〈イ〉が二重母音の表記をなす。
- 20 海野一隆『地図に見る日本』（大修館書店，1999年）p. 145。
- 21 原図においては漢字・仮名は縦書きで，かつ行をなす場合は右から書かれる。ま

たロシア文字は横書きされている。よってケアリスミスによる〈xa〉→〈ax〉の誤りであろう。

22 蘆田文庫本による。

23 調査の途上であるが、『年代記絵抄』等につき一言しておく。同書の旧東京教育大本及び刈谷図書館本には「日本図」がない。また東京大学史料編纂所所蔵『増補年代記絵抄』(元禄5年版)も「日本図」なし。早稲田大学図書館所蔵『年代記大絵抄』も「日本図」をもたない。旧東京教育大学本『年代記新絵抄』(刊年不明、ただし題簽に〈享保二年丁酉改正〉の角書きあり。出雲寺蔵版。)は「日本図」をもつ。〈日本国之絵図〉を題するこの図中、やや不鮮明であるが問題の地名の途中は〈かつほう〉と読める。

(いわい・のりゆき 文学部教授)